

聖書：マタイ 20：29～34

説教題：何をしてほしいのか

日時：2020年1月26日（朝拝）

エルサレムに向かって最後の旅をして来たイエス様はいよいよエリコの町を出るところまで来ました。エリコはエルサレムの隣の町です。エリコを出たら次はエルサレムです。次の 21 章でイエス様はエルサレムへと入られます。イエス様はこの都に特別な思いを持って旅を続けて来ました。前回見た 18 節でイエス様は「ご覧なさい。わたしたちはエルサレムに上って行きます。」と弟子たちに話されて、3 回目となる受難予告をされました。エルサレムでは苦しみイエス様を待っています。そこでイエス様は祭司長や律法学者たちによって裁判にかけられ、ローマ人の手によって死刑にされます。しかしそれはただ殺されるというだけのものではなく、「贖いの代価」を提供するものであることが 28 節に語られました。エリコの町を出たら、後はそのことが行われるエルサレムに入るだけです。そういう意味でいよいよ運命の町エルサレムに向かっての最後の出発となります。大勢の群衆がイエス様について歩きました。時は過越の祭りが行われる時期。各地から多くの巡礼者がエルサレムの都を目指して集まって来る状況がありました。その人々が重なり合い、合流して、イエス様について行く人も益々多くなっていたのでしょ

う。そんな時、道端に座っていた目の見えない二人の人がイエス様に向かって叫び出します。この人たちは目が見えませんが、イエス様を見たわけではありません。しかしいつもと違った雰囲気の中、大勢の人が通る様子の中に、イエス様がここを通られていると聞いて大きな希望を抱いたのです。おそらく彼らはこれまでイエス様についての話を聞いたことがあったと思います。特にイエス様が多くの人々の病を癒されたことについての知らせを耳にしていたでしょう。その方が今ここを通られていると聞いて彼らは思ったのです。この機会を逃してはならない。これを逃したら、またの機会はない。今こそ私たちはイエス様に癒やしていただくのだ！そのように考えて「主よ、ダビデの子よ。私たちがあわれんでください。」と声を上げたのです。

しかし彼らが経験したことは何でしょうか。それは群衆による妨害でした。普段、彼らは人々から良くしてもらって経験の方が多かったと思います。彼らは人通りの多いエリコからエルサレムへと通じる道端に置いてもらっていましたが、エルサレムの宮での礼

拝へ向かう巡礼者たちはいつも彼らに良くしてくれたに違いありません。金銭を恵み、優しく接してくれたに違いありません。ところが今回は違うのです。イエス様に近づきたいのに、近づかせてくれない。それどころかみんなが「黙れ！黙れ！」と言うのです。この時を逃したらもう機会がないから必死になって「主よ！あわれんでください！」と叫び求めているのに、人々は「黙れ」と言って、その声をかき消そうとする。なぜこんなことをするのでしょうか。群衆に悪意はなかったと思います。彼らは大勢の人たちがイエス様について歩いている中、この流れを止めるのは適切でないと考えたのでしょうか。この盲人たちの願いは分かるが、今はふさわしくない。あなたがたには申し訳ないが、今みんながあなたがたのために時間を取れるほど暇な時ではない、と。また過越の祭りに向けて移動中であつたなら、遅れるわけにはいかないという思いもあつたかもしれません。あるいは「あわれんでください。あわれんでください。」という叫びは、「お金をください、お金を恵んでください！」という願いと変わらないものに聞こえたかもしれません。それならもっと他の時にしてくれ！と思う人たちもいたかもしれません。そこで近くにいた人々は「黙れ！とにかく黙れ！」と言って、静かにするようにたしなめたのです。しかし二人はあきらめませんでした。彼らは益々声を張り上げて「主よ、私たちをあわれんでください。ダビデの子よ、私たちをあわれんでください！」と叫び立てました。群衆の方も益々強く、この二人をたしなめようとしたことでしょう。

ここに人間同士の意思疎通の難しさを見ます。群衆は決して悪い人たちではなかったと思いますが、この目の見えない人たちの心からの叫びを聞き取ることができなかつた。必死に訴えていることを受け止めてくれなかつた。叫ぶ方の叫び方にも足りない点はあつたかもしれません。こうしてコミュニケーションはうまく行っていません。一生懸命に叫ぶ人の声を聞いても、周りの人々は悪意なくとも押しつぶしてしまう。「お前は黙っている、いいから今は黙っている」と対応する。

そんな中、私たちが目を留めるべきイエス様のお姿が記されます。三つのことに注目したいと思います。まず一つ目はイエス様は彼らの叫びを聞いて立ち止まってくださったことです。32節に「イエスは立ち止まり」とあります。群衆は止まらないように、止まらないように、前に進みましょう、前に進みましょう！とイエス様を囲んで動いている中、イエス様はその流れに逆らって立ち止まられました。なぜでしょうか。目の見えない人の声が耳に入ったからでしょうか。ただ耳に聞こえたというだけなら、他にもそういう人たちはいました。でもその人たちは止まりませんでした。それに対してイエス

様が立ち止まったのは、単にその声が耳に入ったからではなく、その声を受け止め、大事にしようとする心をイエス様が持っておられたからではないでしょうか。

前回、イエス様は弟子たちに「リーダーになりたい者は、みなに仕える者になりなさい」と言われました。そしてご自身がそういう者であることをお示しになりました。まさにそのように仕えるお方として、イエス様は人々の叫ぶ声に聞く耳を持っておられたのです。そしてよく考えるべきは、相手は目の見えない人たちだったことです。人々から「黙れ！」と言われて、イエス様から遠ざけられようとしていた人たち。ある意味で当時の社会で軽んじられやすかった人々です。ですからここでも後ろに下がってイエス様を邪魔しないように！と言われました。イエス様の足を止めさせる資格はあなたにはない。あなたはそれほどの人物ではない。あなたが叫んでイエス様に迷惑をかけるべきではない。そのように扱われていた人々です。しかしイエス様はそんな彼らの声にも耳を傾けてくださいました。ここにいつも仕える心で歩いておられたお方のお姿を見ます。仕える心で歩いておられた方だから、誰かの叫びをも大切に受け止めてくださった。イエス様はそういうお方です。そしてイエス様は彼らをご自分のもとへと呼ばれます。

2つ目に注目するのは「わたしに何をしてほしいのか」というイエス様のおことばです。イエス様は彼らが何を望んでいるのか分からなかったわけではないと思います。目が見えない人たちが、あわれんでください！と叫んでいるのですから、彼らの願いは明らかかなはずです。しかしイエス様はこうして彼らが自分の言葉で自分の願いをイエス様に告げることが求められました。「信仰を通して恵みを受ける」というのが、聖書に見られる一般的 방식です。これはこの二人にとって確かに信仰を試される機会でした。目が見えるようになることは彼らの最大の願いですが、もしイエス様にそれができないと考えたら、その願いを口にするにはなかつたでしょう。それを述べたところで、イエス様にはできないのですから、落胆し、傷つくだけです。言うだけバカだったということになります。悲しみが深くなるだけです。しかしイエス様は、言いなさいと促されます。「わたしに何をしてほしいのか」「わたしをどのように信じているのか」と。彼らはそう問われて答えました。「主よ、目を開けていただきたいのです。」これは信仰のことばです。彼らのすべての思いを込めた言葉です。この告白を通してイエス様はみわざを行われます。私たちもこのように、イエス様に求めることが大事なことです。

さて結果はどうだったのでしょうか。3つ目に注目したいのは、34節に「イエスは深く

あわれんで」と記されていることです。これはこれまでもしばしば出て来た言葉で、内臓や腸を意味する言葉からできている言葉です。すなわち腸が揺れ動くような、よじれるような、深いあわれみの感情を表す言葉です。イエス様はその憐みによって彼らの目に触れてくださいました。イエス様は癒やしを行う際、相手に触れる必要はなく、ただおことばだけで、そう意思するだけで十分でした。しかし目の見えない人にとって、触った上で癒やされることは特別の意味を持ったでしょう。目が見えない彼らには、その方が確かにイエス様が私に対して何かしてくださっているということが分かる。イエス様はその深い憐れみにより、彼らに、しかも彼らが癒しを必要としている目に触れてくださいました。するとすぐに彼らは見えるようになりました。この目の見えない人が見えるようになる奇跡は、旧約聖書時代から、やがて来るメシヤが行うわざとして預言されていたものです。たとえばイザヤ書 29 章 18 節：「その日、耳の聞こえない人が、書物のことばを聞き、目の見えない人の目が、暗黒と闇から物を見る。」 イザヤ書の 35 章 5 節：「そのとき、目の見えない者の目は開かれ、耳の聞こえない者の耳は開けられる。」 なぜイエス様にはこのようなことができるのでしょうか。これは単にイエス様が神だからではありません。イエス様がこのような祝福を罪人たちにもたらすことができるのは、ご自身が彼らの代わりにすべての罪の呪いを引き受けてくださるからに他なりません。この後まもなく十字架にかかって、私たちを贖い出すための代価（身代金）を払ってくださるからです。その犠牲を通して、イエス様はご自身により頼む者たちを自由に罪の支配・サタンの支配から、神の恵みの支配・神の国の祝福に移すことができます。イエス様が地上で行われた様々な癒やしのみわざは、神の国がここに実現し始めていることを目に見える形で示すしるしです。それはやがて究極的に実現する完全な神の国の前味であり、先取りとしての意味を持っています。その神の国の力が直ちにこのように示されました。そうして二人はイエス様について行ったのです。イエス様の弟子となり、イエス様に従う者としての生活へ進んで行ったのです。

この記事から私たちが学ぶことは何でしょうか。それはこれからいよいよ贖いのみわざが行われる舞台エルサレムへとイエス様は入って行こうとしています。そんな重大な時でも、イエス様は社会から低く見られている者、また小さな者たちの叫びに耳を傾けてくださり、それに向き合ってくださいとお方であるということです。私たちもそれぞれに色々な心の叫びを内に持っていると思います。それを誰かに聞いてもらいたい、受け止めてもらいたいと思っています。しかしなかなか普段の人間関係の中ではそうは行かない。伴侶との間でも、親子の間でも、友人関係の間でも、教会の兄弟姉妹の間でも。

悪気はないかもしれませんが伝わらない。こちらの伝え方が悪いのかもしれませんが届かない。「黙れ」と言われてしまう。「下がっているように」とたしなめられてしまう。この心の叫びをどこへ持って行ったら良いのか、途方に暮れるような時があるのではないのでしょうか。しかしここに福音があります。それはイエス様は私の心の叫びに聞いてくださるということです。他の人には難しくてもイエス様は受け止めてくださる。これは先に見ましたように、イエス様が仕えるために来てくださったお方として、私たちのような者にできても、聞く耳、聞く心を常に持ってくださる方だからです。社会から見下されていた人にも向き合われたように、イエス様はこの私にも間違いなく同じようにしてくださる。愚かで、取り上げるに値しない者であっても、イエス様は立ち止まり、関わってくださる。

ある人はこう言いました。クリスチャンであることは、何という大きな喜びでしょう。困っている時は、いつでも私たちを助けることができ、来る日も来る日も、私たちの前に立って、「わたしに何をしてほしいのか」と聞く友人を持つことを、考えてもご覧なさい、と。実に私たちはそのような友、救い主を持っています。私たちはその方に何でもお話しして導いていただく生活をしたいと思えます。私たちがこの方に願い求めるべきことは沢山あります。ヨハネの黙示録3章17節：「あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、足りないものは何もないと言っているが、実はみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸であることが分かっている。」 私たちは、今日の箇所に出て来た目が見えない人たちは特別な問題があったら、「何をしてほしいのか」と問われて即座に答えるべきものを持っていたが、私にはそれほどの願いは、・・・などと言うのでしょうか。今見た言葉に、あなたは「実はみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸であることが分かっている」とありました。私たちも自分のみじめさ、哀れさ、貧しさをわきまえ知って、「主よ！あわれんでください！」と叫び求めるべき者なのではないのでしょうか。自分の犯した罪の赦しのために、また罪から離れた生活ができるように、また伴侶や家族や周りの人々を愛せるように、そうしてイエス様を映し出す人となれるように、また私に悪を行った人を赦し、善をもって悪に打ち勝つことができるように、イエス様にその点でももっと似る者となるように。その他、日々の様々な助け、心にかかっていること等々、主に願い求めるべきことは沢山あるのではないのでしょうか。主はそれらに聞いてくださり、御心に従って、ご自身の贖い主としての力を持って最も良い仕方で私たちに答えてくださるのです。

いよいよ十字架が待つエルサレムへ進もうとする時も、叫ぶ者たちの声に心と耳を傾け、立ち止まってくださった主。この方が今週も私たちとともにいてくださいます。その方は「何をしてほしいのか」と私たちにも尋ねてくださいます。私たちはそのように言うてくださる主を見上げて感謝し、主に祈り求める歩みをしたいと思います。そして十字架の犠牲を通して主が勝ち取ってくださった神の国の祝福を豊かに味わい、さらに先に用意されている完全な天の御国を待ち望む歩みへと、主に従って導かれて行きたいと思ひます。